

デマンド(要求)ばかりで コミュニケーション能力欠落男

人と人とのコミュニケーションは大切だ。それが言葉であり紙であり、時には画像であったりする。しかし中にはそれをも拒否する大バカ者も存在する。

20年ほど前に同年代の稲作農家の彼は、私の仕事をパートで手伝うことになった。数週間が経ち、どうしても彼とその日の内に連絡を取り、明日の仕事の準備をしなければならなかった。夕方6時過ぎに電話をして、その彼の母親が「田んぼの見回りに出掛けています」と言うので、7時ごろに電話をしたところ、また母親が電話を取り「風呂に入っています」と言うので、かけ直してもらえるように伝えた。

1時間経っても電話が来ないので、3回目の電話をしたが、やはり母親が電話に出て「多分パチンコに行きました」と言ったので、さすがの私もカチンと来て「今日中に電話をするように」と伝えたが、やはり電話が来なかった。

翌朝、私は彼に「どうして電話をしなかったのだ？」と聞いたが「聞いていません」と珍回答をした。

数日が経ち、また連絡することがあったが、今度は前回と同じこと

なるのを避けるためFAXで連絡をした。用紙に連絡事項を書き、電話番号と同じ番号のFAX番号を押ししたところ、あの母親が受話器を取ってしまい、FAXを受信できなくしてしまっ

た。そこで2回目は彼の母親に電話をして「FAXを送りますので受話器を取らないでください」と丁寧に伝えた。3回目のFAXを送ると「もしもし」とスピーパー勘違いカチャンの声が聞こえてきた。私は電話を取った母親にこう言った。「電話番号とFAX番号を別々にしてください」。もちろん釈迦に念仏と同じで、**激貧農家に日本語は通じない**ことは分かっていたが。

翌朝、彼に電話を取るつもりがなければ、せめて留守番電話にしてくれを伝えたが、「金がない」と一番的確な回答を頂いた。やはり、トラブルを避けるためにも番号は別々にすべきだろう。2回線を買わなくても月額700円で利用できる二重番号にすると、ISDN回線にすべ

忘年会で言い忘れたこと、 書きます

Vol.11



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

きであろう。現在では携帯電話が普及しているのでもこのようなトンチンカンな会話もないと思われるが、そうとも言い切れない。彼のようなコミュニケーション欠落者、時間のメリハリ、コントロールができない日本人は決して数が減っているわけではない。それを物語っていることがあった。主人公はやはり先ほどの彼だ。人柄は良いが、イマ

オレにも 言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

イチ君の彼の待遇を考えていたところ、十勝の小麦農家から人材ヘルプ要請があり、小麦収穫シーズンまで1カ月あったので、彼を紹介した。賃金は直接相手からもらうこと、2週間の泊まり込みになるので食事や宿泊、保険関係を事前に決めて、万全の状態を送り出す用意はできた。

出発前日になって、決められた賃金は安いので、行きたくないと言い出した。相手との約束を破るわけにもいかないの、日給で1000円を長沼に帰ってきた時に追加支払う約束をして、翌日送り出した。

十勝でも彼の仕事ぶりは十分に相手先から評価をもらい、彼が戻ると約束の追加賃金を支払った。そして夏が終わわり、稲刈りシーズンになると、実家のコメの収穫を始めるために、私の農場を去ることになった。ここまでの話だと、めでたしめでたしなのだが、およそ5年が経ったところ、派遣先だった十勝の農家と彼の話題になった。驚きの事実が判明したのだ! 十勝の農家によると彼が仕事を終え長沼に帰る時に「こんな金額では困る」と言い出したので、日給で1000円余分に彼に支払ったと打ち明けた。

つまり、コミュニケーション欠落者の彼は私と十勝の両方から契約以外のお金を徴収したことになる。十

勝の農家は私に気兼ねして5年間、話さなかったそうだが、非常識の彼の行動にはあきれてしまった。

風の便りに彼のこと小耳に入っただので、近況を聞くと、45歳でいまだ独身で、家にはエロ本とDVDが散乱しているという。ちなみにDVDはソフット・オン・デマンドのものとか。周りもそんな独身の彼を見かねて、女性を紹介したが、普段の男っぷりからは想像できない、まさしく借りてきた猫のようにおとなしかったそうだ。

「農業者」がやりたいの? 本音がなりさん!

12月15日に本誌読者の会主催の忘年会が、高橋がなりさんの国立ファームのレストラン農家の台所で行われた。がなりさんご本人の成功話や失敗話を取り入れ、50名ほどが拝聴した後、私との「ガチンコ舌戦」が始まったが、基本的に絶対的権力者とお金持ちとはケンカをしないことになっているので、正直言って場を盛り下げてしまったかもしれない。失礼とは思ったが、それなりにがなりさんのことをリサーチしたが、正直がっかりした。

嘘つきの特徴であるくすんだ目が見られたり、非常識なことを話すのかと期待をしていたのだが、予想と

外れてしまった。家に帰ると「がなり」を捨て雅也に戻る。愛する妻の夕食を食べ、子供と遊ぶのが日課、最近子供の成績が落ちたのは父親の俺が悪いとウソぶく。

忘年会に出された食事は舌の肥えた私には特別に美味しいものとは思わなかったが、魅力的な素材、特にソルトリーフの自らの塩加減には驚いた。普通、どれほどおいしいと言われるレストランでも2度は行かないが、また来てみたい、そして恵比寿の2号店にも行ってみたいと心から思った自分にも驚いた。

さあ、これから本場の「舌戦」だ。がなりさん、あなたは農業に騙されている。生キヤラメルで有名な北海道の田中義剛になりたいのですか? 本誌先月号で、あなたは「飲食事業は目的ではありません。特選野菜の生産法人として成り立つための方法です」と発言していますね。

事業を始めて2年、構想を含めると3年以上の時間を過ごしているが、農地から生産物を作ることに關して、まだ新参者扱いされても仕方がないのではないだろうか。知識そのものよりも、自分のお子さんが将来どの様な道に進んでも構わないと発言されたことには驚いたからだ。

農業は、良くも悪くも家族経営である。忘年会の第1回の舌戦の話

のことを覚えていらつしやるだろうか。どんなに素晴らしい経営をして、その世代限りで終われば、「立派な農家だったね」で終わります。

江戸っ子の基準に似ているが、最低2代、普通は3代続かないと法律の業の解釈には当てはまらない。ですから、本場に農業に参入するのであれば、がなりさんのご子息が農家になる必要があります。もしよろしければ、将来「ご子息を人質として預かせていただいてもいいですよ」。

もう一点気になったことがあります。英検の資格をお持ちでありながら、米国を嫌っている(?) 姿勢はよろしくありません。農業であっても一般の産業と変わらないのです。よって米国の経済やその方向性と日本農業には間違いなく関連性が存在します。

米国を知るためには現地の農業雑誌「successful farming」と日本農業新聞の2つの購読をお勧めする。どちらも教師的な存在ではあるが、一つには反面の文字が付くことを留意していただきたい。

ありがたいお話もあった。私をホリプロに紹介して日本農業を明るくさせる計画が存在するようですが、ハリウッドを目指す私には夢が小さすぎます。